

資料

手賀勝美植物腊葉標本の概要について

大森威宏・高橋克之

群馬県立自然史博物館：〒370-2345群馬県富岡市上黒岩1674-1

要旨：本コレクションは明治期に採集された植物標本からなる。産地情報がある標本603点中の大部分の産地は前橋、赤城山、榛名山であった。本コレクションから従来群馬県から記録がない、サギソウ、オオミズトンボが見いだされた。このほか手賀コレクションにはハナハタザオ、ヒナノキンチャクの未知の産地の標本や、ミシマサイコの分布域を考察する上で重要な標本が含まれる。

キーワード：手賀コレクション，明治時代，植物標本，新記録

Brief report on Herbarium Specimen (Tega's Collection)

OHMORI Takehiro and TAKAHASHI Katsuyuki

Gunma Museum of Natural History :
1674-1, Kamikuroiwa, Tomioka, Gunma, 370-2345 Japan

Key Words: Tega's Collection, Meiji, Herbarium specimen, New record.

コレクションの概要

手賀コレクションのうち、何らかの産地情報があり、自生か栽培かが明確なものは603点である。これらの採集者は手賀勝美氏のほか、石塚和代氏、島田氏のものが含まれた(表1)。これらの標本603点の内訳は日光産の18点(うち3点は植栽)以外は群馬県産で、218点は前橋産の標本が占め、次いで赤城山産(135点)、榛名山産(114点)が多かった(表1)。採集年次は手賀氏と石塚氏採集のものが1894~1895年、島田氏のものが1907年であった。

表1 手賀コレクション採集者ごとの産地別点数
(産地が判明しているもののみ)

産地/採集者	手賀勝美	石塚和代	島田	計
前橋	191	6	21	218
橘山	24			24
赤城山	135			135
水沢	33			33
榛名山	114			114
迦葉山	22			22
県内その他	33	6		39
県外(日光)	18			18
計	570	12	21	603

顕著な標本

群馬県から記録がない種

サギソウ (*Pecteilis radiata* (Thunb.) Raf.:ラン科)

証拠標本：GMNH-BS-9640, 9641 赤城山，

1895年8月17日

サギソウは、東北以南の湿地に自生するラン科の多年草である(大井, 1983; 環境庁自然保護局野生生物課, 2000)。群馬県の新旧の植物誌からサギソウの記録はなかった(戸部ほか, 1968; 1987)が、本コレクションから1895年に赤城山で採集された標本が見いだされた(図1)。この標本と同じ日の採集品にはタチモ、イトイヌノヒゲ、モウセンゴケなどの浅い池沼や貧栄養の湿地に生育するものが含まれる。また同日の採集品にはカワラケツメイやヌルデなど赤城山では山麓のみに出現する種が含まれる一方で、マツムシソウ、コウリンカ、マルバダケブキなどの山頂カルデラ域に特有な種を欠く。このため、この標本の採集地は、山麓から中腹にかけての湧水によって涵養される非泥炭型の貧栄養湿地であった可能性が高い。明治時代に



図1 サギソウ *Pecteilis radiata* : GMNH-BS-9640

は赤城山麓にこのような湿地が存在したことが示唆される。この点は1950年代に赤城山南麓の大胡町にある沼からタチモやミミカキグサが採集されている点（証拠標本：タチモ：GMNH-BS53243，ミミカキグサ：GMNH-BS51892）とも矛盾しない。

サギソウは群生し、よく目立つ植物であるにもかかわらず、戦後編纂された群馬県植物誌には記録がない。このことから、赤城山のサギソウは明治時代には存在したが、旧群馬県植物誌の編纂を始めた1950年頃までに湿地開発または園芸採取によって絶滅したと考えられる。

オオミズトンボ (*Habenaria linearifolia* Maxim.: ラン科)

証拠標本：GMNH-BS-9642, 9643 赤城山,

1895年8月17日

オオミズトンボは、貧養湿地に生育する中型のラン科植物で、しばしばサギソウと同所的に生育する。手賀コレクションに含まれていた本種の標本(図2)はサギソウと同一行程で採集されたものである。このことから、赤城山のオオミズトンボもサギソウと混生していたと考えられる。この植物もサギソウと同様の理由で1950年頃までに絶滅した可能性が高い。

県内希少種の新知見

ハナハタザオ

(*Dontostemon dentatus* (Bunge) Ledeb.: アブラナ科)



図2 オオミズトンボ *Habenaria linearifolia* : GMNH-BS-9642

証拠標本：GMNH-BS-10176 中山峠, 1895年7月30日

ハナハタザオは、赤城山から記録があり(戸部ほか, 1987)また、その麓に位置する前橋市(旧木瀬村)産の標本(GMNH-BS55)も群馬県立自然史博物館に収蔵されている。手賀コレクションの中山峠は、採集当日と翌日に中之条町四万で採集された標本が含まれることと、採集者が前橋市在住であることから、吾妻郡高山村と旧北群馬郡子持村の境界に位置する中山峠と考えられる。この中山峠一帯は古くから採草地や牧草地として使用され、ハナハタザオの生育環境とも合致する。ハナハタザオは遷移進行や、帰化植物との競合で全国的に減少し、環境省の絶滅危惧I A類(CR)に指定されている(環境庁自然保護局野生生物課, 2000)。群馬県ではハナハタザオは情報不足種である(群馬県, 2001)が、近年まったく確認されず、絶滅したと考えられる。

ヒナノキンチャク

(*Polygala tatarinowii* Regel: ミソハギ科)

証拠標本：GMNH-BS-9971 榛名山, 1895年9月28日

ヒナノキンチャクは乾いた草地に生育する矮小な一年草で、群馬県では吾妻郡草津町、旧勢多郡北橋村、多野郡神流町叶山から記録があった(戸部ほか, 1987)。ヒナノキンチャクは小型で、偶発的に発生する先駆的な性質が強いため、乾いた火山噴出物や崩壊地形が多く見られる榛名山には分布した可能性はある。ヒナノキンチャク

は、最後まで記録された叶山（証拠標本1968年：GMNH-BS52817）でも石灰岩採掘により絶滅し、県単位では絶滅種とされた（群馬県，2001）。

ミシマサイコ (*Bupleurum scorzonerifolium* Willd.:セリ科)
証拠標本：GMNH-BS-9791, 9792 橋山，

1894年 8月17日

ミシマサイコは群馬県では赤城山や榛名山，子持山から記録がある（戸部ほか，1968；1987）草原性の植物で，遷移進行や薬用採取で減少し，全国的に絶滅危惧 I B 類 (EN) の状態にある（環境庁自然保護局野生生物課，2000）。今回標本がみつかった橋山は前橋市と渋川市（旧勢多郡北橋村）の境にある泥流丘で，頂上でも海拔は228mである。橋山周辺は住宅地や病院などの公共用地としての開発や圃場整備によってフロラの変化が著しい。また，橋山自体も森林の遷移と林床の管理放棄が急速に進み，現在橋山とその周辺にはミシマサイコが生存できる環境はない。橋山のミシマサイコの標本は，明治時代に草地在赤城山から現在の前橋市郊外まで分布していたことを示唆している。

イバラモ (*Najas marina* L.:イバラモ科)

証拠標本：GMNH-BS-9971 榛名山，1895年 9月28日

イバラモは群馬県では南部の館林市や桐生市から記録があった（戸部ほか，1987）。一方，角野（1994）は榛名山付近の分布を示しており，今回の標本の発見は，このことを裏付ける結果となった。イバラモは長野県野尻湖や諏訪湖でも記録があり，また北海道まで分布するため（角野，1994；今井，1997），冬季結氷する榛名湖に分布があっても不思議ではない。イバラモは群馬県内では近年確実な記録がないため，県レッドデータブック作成時にリスト漏れになった可能性が高く，実態は情報不足種か絶滅危惧 I 類の状態にあると考えられる。

手賀勝美と標本の移管までの経緯

コレクションは明治中期に群馬県内を中心に採集された標本で保存状態は極めて良好である。本県の植物標本の記録としては，明治中期のものは数が少なく当時の自然環境を知る上での重要な手がかりとなり，価値は高い。

最初に標本の存在が確認されたのは1982年で，前橋市教育資料館の収蔵品の中から発見された。1982年と84年に「手賀勝美標本展」として市民に紹介されたが，その後は所在不明になっていた。2004年7月になって標本は前橋市立図書館書庫で保存されていることが判明し，翌年末には植物標本目録，知事の感謝状，標本箱などが前橋市教育プラザ内の教育資料館に収蔵されていることが明らかになった。

植物標本目録（明治33年作成）には357種が記載されて

いる。巻頭文には「植物研究の必要により採集したもの」と記され，指導には鈴木棟一群馬師範教諭が当たっていたことが判明した。

採集者の手賀勝美氏は1876年（明治9年）に前橋市国領町に生まれ，医師宅の書生から代用教員を経験，群馬県尋常師範学校を卒業後，東京高等師範学校国語漢文専修科に再入学した。国語教師として山形県，東京都の教員を歴任し，東京外国語学校清語専修科に進学，大正9年に前橋高女教頭として群馬県に招かれる。その後，藤岡高女，富岡高女（富岡東高）校長を歴任，退職後は前橋市上水道誌を執筆，1955年（昭和30年）に80歳で没している。

手賀氏は17歳の1894（明治27）年から翌年にかけてのわずかの間に膨大な採集を行った。採集場所は前橋とその周辺，赤城山，榛名山，さらに沼田，迦葉山，日光，四万，中山峠にもおよんでおり当時の交通網から見ると，極めて精力的な採集活動を展開していたことになる。次女の榎田たか氏によると手賀氏が植物採集を行ったのは，生涯でこの2年間だけであるという。標本は手賀氏が東京高等師範学校に進む直前に，鈴木教諭の勧めで前橋市立厩橋高等小学校に寄贈した。当時の小倉信近知事は感謝の木杯を贈っている。標本はその後，桃井小を経て教育資料館に収蔵された。同館は戦災からも免れ，今日に至るまで良好な状態で保管されてきた。

2006年3月に標本は，前橋市から群馬県立自然史博物館に移管された。

謝 辞

手賀コレクションの移管に際しては前橋市教育委員会須田昭司氏にご尽力頂いた。上毛新聞社 桑原高良氏のお陰で手賀氏の次女の榎田たか氏が判明した。また標本の存在を新聞紙上に報道して頂いた。榎田たか氏には，手賀氏の詳細について長時間にわたり教示頂くとともに，移管を快く承諾して頂いた。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 今井建樹（1997）：136. イバラモ科 NAJADACEAE, 長野県植物誌, pp.1192-1194, 信濃毎日新聞社, 長野。
群馬県（2001）：群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編. 群馬県環境生活部自然環境課, 前橋, 153pp.
角野康郎（1994）：日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京, 179pp.
環境庁自然保護局野生生物課（2000）：改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— 8 植物 I（維管束植物）, 660pp, 財団法人 自然環境研究センター。
大井次三郎（1983）：新日本植物誌 顕花編. 至文堂, 東京, 716pp.
戸部正久・里見哲夫・島野好次（1968）：群馬県高等植物目録, 群馬県植物誌, pp.15-160. 群馬県。
戸部正久・里見哲夫・島野好次・松沢篤郎・須藤志成幸（1987）：群馬県自生高等植物目録, 群馬県植物誌 改訂版, pp.153-393. 群馬県。